

短編小説

土師 猛

フエステイバルホール

3階3列33番席——これは忘れることのない数字だ。清々しい新年を迎えるために、フエステイバルホールでウイン管弦楽団のワルツを一月四日聴くことにした私の座席番号である。オール3の数字にチケットを手に入れた時、何かが起こりそうな期待と不安を覚えたが、至福の日となった。

前半の演奏が終わって休憩に入った。ホール内が明るくなり、私は入口で受け取ったコンサート案内のチラシを出し読み始めた。

「あの一」と声かして隣に座っている女性が私の方を向いている。「何か?」「失礼ですけど——さんでは」どうして私の名前を知っているんだ?「そうです。失礼ですが」「やっぱり……」笑顔が私の記憶を呼び起こした。

「君……。驚いたな!笑うと昔のままだ」

「もうおばあさんよ」隣に座っている女性を私は懐かしい胸の痛みと共に眺めた。「あなた少しも変わらないね」「クラシックのコンサートにはよく……」「はいときどき」「東京にいたころは二人でよく映画を観に行ってたわね。みゆき座。日比谷劇場……あなたとの想い出いっぱい」「どうして突然私の前から消えたのよ」「やれやれ。こんなことってあるのかな」

——若い日の熱に浮かれた東京での恋の日々。まさか、二度としかも大阪で会うことがあるうとは思わなかった。二人はちよつと黙っていた。言いたいこと聞きたいことは、どちらも分っていたのだ。チャイムが鳴りホールの明かりが落ち、後半の演奏が始まった。彼女と映画を観に行った時していたように手を握って、彼女の鼓動を感じながらヨハンシュトラウスのワルツを楽しんだ。三拍子のリズムに合わせてお互いに握っている手を強く弱くと……。二人は偶然の再会を楽しんだ。 完